

目 次

初学百首〔二期〕	(1) 〵 (5)	5 首	1
二見浦百首〔二期〕	(6) 〵 (17)	12 首	5
大輔百首〔二期〕	(18) 〵 (20)	3 首	18
閑居百首〔二期〕	(21) 〵 (25)	5 首	22
早率百首〔二期〕	(26) 〵 (27)	2 首	27
重早率百首〔二期〕	(28) 〵 (31)	4 首	29
花月百首〔二期〕	(32) 〵 (38)	7 首	32
十題百首〔二期〕	(39) 〵 (41)	3 首	39
譚合(六百番)百首〔二期〕	(42) 〵 (48)	7 首	42
正治(初度)百首〔三期〕	(49) 〵 (64)	16 首	50

(上)

凡例.....v



## 凡 例

一、本書は、定家の名歌の注釈である。選歌の規準として、千載、新古今、新勅撰入集歌、及び晩年の定家卿百番自歌合（前稿本の歌も含む）——繁雑となるので、以下「百番」と略——の歌は、重複があるが、洩れなくすべて入れた。周知のごとく千載集では、若き定家は父俊成の助手の役割を果たしたとおぼしく、定家自身も初の勅撰集入集である。次の新古今では、まさに脂の乗り切った円熟の極みであった定家が新古今歌壇を領導したのであり、人によく知られた秀歌も多い。三つ目の新勅撰は、晩年の定家の単独撰であり、百人一首の「こぬ人を…」の歌もここに入っている。これらに加えて、人口に膾炙した定家の歌も含めて、238首を注釈した。

定家の歌は、一般に

- 一期・初学・習作期（元暦二年（一一八五）24歳頃まで）、初学百首、堀河百首
- 二期・達磨歌・新風歌風期（文治二年（一一八六）25歳頃～建久七年（一一九六）35歳頃）、目次参照——以下同じ——
- 三期・新古今歌風完成期・妖艶風全盛期（建久八年（一一九七）36歳頃～建永二年（二二〇七）46歳頃）
- 四期・新古今後の反省転換期・建保歌壇期（承元二年（二二〇八）47歳頃～承久三年（二二二二）60歳頃）
- 五期・それ以後

例に分けられている。

凡 二、本文は、(229)3037まで『冷泉家時雨亭叢書 拾遺愚草 上中』、『同 拾遺愚草 下 拾遺愚草員外 …』（共に朝日新聞

v 社）に拠り、歌番号は『藤原定家全歌集（冷泉為臣編）』に従った。翻刻の方針としては、原本に忠実であることを旨としたが、濁点を付し、底本の、歴史的仮名遣いと異なるものは、（ ）で指摘した。

三、注釈は、【口語】訳、【語注】、「補説・参考事項(Ⅱ▽)」の順とした。【訳】は原文理解のため、意識ではなく、逐語訳とした。勅撰集などの本文については、おおむね『新編国歌大観』に拠った。また「和歌文学大系」(明治書院)のシリーズは、上記の名称を省き、例えば、「明治・万代〇」などとした。略称は以下の如くである。

『新古今歌人の研究』久保田淳、昭和四八(一九七三)年…久保田(・研究)

『藤原定家研究(増補版)』安田章生、昭和五〇(一九七五)年…安田

『定家の歌一首』赤羽淑、昭和五一(一九七六)年…赤羽・一首

『藤原定家(日本詩人選II)』安東次男、昭和五二(一九七七)年…安東

『拾遺愚草古注(上)(中)(下)』昭和五八(一九八三)年、同六一(一九八六)年、平成元(一九八九)年、その中の「拾遺

愚草抄出聞書(C類注)」、「拾遺愚草不審」(以上(上))、「拾遺愚草抄出聞書(D類注)」、「拾遺愚草摘抄」(以

上(中))、「拾遺愚草俟後抄」(下))、なお未刊国文古註釈大系7に、「拾遺愚草抄出聞書」(B類注)が収めら

れている。順に〈C〉〈不審〉〈D〉〈摘抄〉〈俟〉〈B〉と略。

『王朝の歌人9 藤原定家』久保田淳、昭和五九(一九八四)年…久保田・定家

『訳注 藤原定家全歌集 上、下』久保田淳、昭和六〇、六一(一九八五、一九八六)年…全歌集

『藤原定家の歌風』赤羽淑、昭和六〇(一九八五)年…赤羽

コレクション日本歌人選01『藤原定家』村尾誠一、平成二三(二〇一一)年…コレ

〈千載関係〉

『八代集抄 下巻』…八代集抄(新古今でもある)

『千載和歌集』(岩波文庫、久保田淳、岩波書店)…文庫

『千載和歌集』(新日本古典文学大系10、片野達郎、松野陽一、岩波書店)…新大系

『千載和歌集』(和泉古典叢書8、上條彰次、和泉書院)…和泉

〈新古今関係〉(煩しくなるので、「新古今」という文字(及び著者の名)は入れなかった)

『本居宣長全集』第三卷「美濃の家づと」(筑摩書房)…美濃

『新古今和歌集』(日本古典文学大系28、岩波書店)…旧大系

『新古今和歌集』(日本古典全書、朝日新聞社)…全書

『新古今和歌集』(日本古典文学全集26、小学館・新編同43)…全集

『完本新古今和歌集評釈 上、中、下』(東京堂)…完本評釈

『新古今和歌集全註解』(有精堂)…全註解

『新古今和歌集 上、下』(新潮日本古典集成、新潮社)…集成

『新古今和歌集』(新日本古典文学大系11、岩波書店)…新大系

『新古今和歌集 上、下』(角川ソフィア文庫、角川学芸出版)…ソフィア

『新古今和歌集全注釈(全六巻)』(角川学芸出版)『集成』『ソフィア』と同じ筆者(久保田淳)であり、氏には『新古今

和歌集全評釈(全九巻)』の原著があるが、内容はこの著に包含される部分もあるとみられるので、この注釈ではとり

あげなかったところもある)…全注釈

〈新勅撰関係〉

『新勅撰和歌集全釈(全八巻)』(風間書房、神作光一、長谷川哲夫)…全釈

また『全歌集』以外の定家(歌)の注釈は、以下である(拾遺愚草の番号順)。

(上)

初学百首：『定家 初学百首、韻歌百二十八首、千五百番歌合百首、内大臣家百首 注釈』（小田剛、武蔵野書院）。

初学注釈——略称、以下同じ——

二見浦百首：『二見浦百首 藤原定家拾遺愚草注釈』（佐々木貴子・浅岡雅子・神谷敏成、桜楓社）・二見浦注釈

大輔百首：『藤原定家『皇后宮大輔百首』注釈（上）（下）』（浅岡雅子・神谷敏成、北見大学論集12・13）・大輔注釈

閑居百首：『閑居百首』注釈（上）（下）』（神谷敏成、北海道自動車短期大学研究紀要8・10）・閑居注釈

早率百首、重早率百首：『定家 早率、重早率、十題百首注釈』（小田剛、和泉書院）・早率、重早率注釈

十題百首：前述・十題注釈

調合百首：『六百番歌合』（久保田淳、山口明穂、岩波書店）・六百番注釈

院初度百首：『定家 正治百首、御室五十首、院五十首注釈』（小田剛、和泉書院）・院初度注釈

千五百番歌合百首：前述・千五百番注釈

内大臣家百首：前述・内大臣注釈

（中）

韻歌百二十八首：前述・韻歌注釈

仁和寺宮（御室）五十首：前述・御室注釈

院五十首：前述・院五十注釈

最勝四天王院名所御障子歌：『最勝四天王院障子和歌全釈』（渡邊裕美子、風間書房）・最勝全釈。「藤原定家」「最勝

四天王院障子和歌」覚書」（加藤睦、立教大学日本文学108）・最勝覚書

定家卿百番自歌合：『中世和歌集 鎌倉篇』（川平ひとし、岩波書店）・百番注釈

略称は他にもあるが、煩雑となるので、以上でとどめることとする。

(上)

初学百首、春

(1) 1 いづる日のおなじひ(同)かり(光)によもの海(四方)の／なみにもけふ(今日)やは(春)はたつらむ(立)

【訳】 出る日の同じ光の中に、四辺の海の波にも今日は春が立つのであろうよ。

初学百首・治承五年（一一八二）、定家20歳の詠であり、百首歌の処女作でもある。組織・歌題はおおむね久安百首と同一とされている。

【語注】 ○よもの海 四海。八代集三例、初出は金葉311。 ○腰句 字余（う）。 ○たつ 「浪」の縁語。

▽「春廿首」（四季歌）、初学百首、及び十五の百首（歌）のみならず、拾遺愚草（279首・全歌集）すべての冒頭の一首。百首歌の巻頭は、立春詠が常套であり、ここでは海上の立春、いつもの、昨日と何ら変らない同じ光に、四周の海の波にも今日春はきつと立っているだろうと、寿いでいる。賀歌的詠。「や」は疑問か。①15続千載1、春上「春たつこころをよみ侍りける」、第三句「わたつ海の」。俟「日光のてらさずといふことなきがごとくに、今日の立春も又、四海の波上までも同時にへだてなくいたるべき事をいへり。誠に巻頭めき大きな歌也」。久保田・研究522頁「立春を海上の日出において視覚的に捉えようとした一首：三句で一字を余した余裕ある詠みぶりや、構図に窺える気宇の雄大さ」。久保田・定家34、35頁。赤羽103、120頁。

## 初学百首、春

(2) 5 梅花こずゑをなべてふくかせに／そらさへにほふはるのあけぼの

【訳】 梅花（の）、梢をすべて吹く風によって、空までもが香っている美しい春の曙よ。

【語注】 ○そらさへにほふ 詠歌一体で制詞とされる。「定家好みの感覚のひらめきがある。」（安田章生『西行と定家』37頁）。○はるのあけぼの 「秋の夕暮」に対する。八代集七例（うち新古今五）、初出は千載28。なお「曙」の八代集初出は後拾1102、さらに「曙」八代集二〇例のうち、新古今十四例。

▽梅花の梢をおしなべて吹く風に、地上のみならず、空までもが匂い美しい春曙を歌う。主題は梅。俟「梅花ざかりに、よもの花の梢ををしなべて吹かせなれば、「そらさへにほふ」といへり。」久保田529頁。安田68、69頁。赤羽103、121頁。田中裕『水郷春望新古今私抄』143、144頁。

【参考】 ①7千載28「梅がえの花にこつたふうぐひすのこゑさへにほふ春の曙」（春上、仁和寺法親王守覚）

③52義孝10「春かぜのそらなるほどはむめのはなこずゑこそなほうしるめたけれ」（①11続古今65）

## 初学百首、秋

(3) 37 あまのはらおもへばかはる色もなし／秋こそ月のひかりなりけれ

【訳】 大空（を）、思ってみると変った色も何もない、秋は月光こそが色なのだ。

【語注】 ○おもへば 「思へば同じ」を始め、「思へば」に「うとき」「つらき」「遠き」などを重ねて視野を切り換える句法。（新大系・百番51）。○かはる色もなし 月の色か、空の色かどちらかであるが、「月の色のこととする」（新勅撰・全釈）。○下旬 「月の光となっているものは秋なのだ、の意でなければならぬ」（新勅撰・全釈）。

▽三句切で、天空も思ってみても何ら変る色もない、つまり秋（の色）こそが月の光なのだとの詠。初学百首より、唯一の新勅撰自撰の一首。①9新勅撰256、秋上。⑤216百番51。⑤335井蛙抄62。C4「名歌也。「おもへば」といふに心得あり。よくくおもへば、あまの原にかはるいろはなき也。秋ばし月の光と成て人に心をつくさずるか也。／秋月揚明輝の心也。」・D193、D193の順序「秋月揚明輝の心也。名歌也。∴秋が月の光と∴かと也。」。俟「秋の来て月のさやかなる事各別に見なして、あらぬ物のやうなるより、つくくも思ひおもへば、さして春夏にかはる色はなき也。秋気いたりてよろづの物すみわたり、肅殺の気の行はる、より、ものすこく心もすみわたりて月の光輝をそへ侍れば、「秋こそ月の光成けれ」といへり。」。六家抄949「月はいつもおなじ物なるが、秋といへば一段にみゆるほどに、秋が月の光よと也。」。久保田・研究533、560頁。安田384頁。安東14〜25頁。久保田・定家39頁。コレ02。

## 初学百首、冬

(4) 52 冬きてはひと夜ふたよをたまざ、の／はわけのしものところせきまで

【訳】 冬がやって来ては、まだ一夜二夜であるのに、もう玉笹の葉の一枚一枚に霜が置くのは、所狭しとまで（に置いてくる）。

【語注】 ○ひと夜ふたよ 「笹」の縁語「一節二節」を掛ける。「一夜二夜」及び「二夜」共に八代集では、千載一例